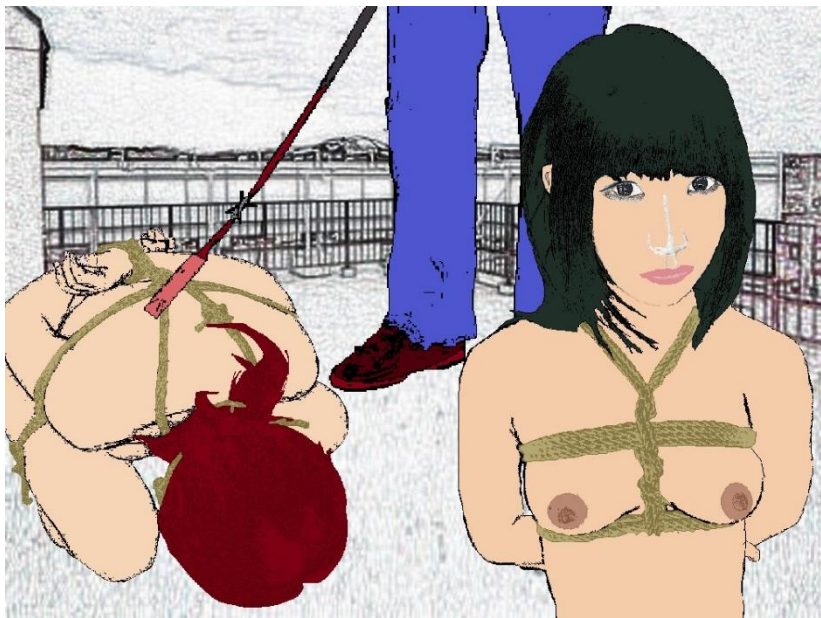


Family SM triangle

Side:Mama



Horikado Nagayasu

目次

1. 限界ぎりぎり	- 3 -
2. 娘への疑惑	- 39 -
3. 露出フィットネス	- 47 -
4. わたしの播粉木縄禪	- 56 -
5. 娘の縄禪と輪ゴム禪	- 85 -
6. パパの忘れ物	- 93 -
7. アルバイト	- 105 -
8. 遊園地	- 156 -
9. 父母娘で三角関係! ?	- 177 -
後書き	- 225 -

1. 限界ぎりぎり

九月も下旬だというのに、ノースリーブのブラウス。しかも、フリルのミニスカート。十年前の、SMプレイを再開した頃なら、わたしも露出プレイに燃えたけれど、とっくに三十路を越えた今では羞ずかしさが先に立ってしまいます。

セクシーな服だったら、それなりの気持ちにもなれるでしょうが、この服は救援物資に送っても雑巾にされそうな、あちこちほつれて補修して生地もすり減った古着なので、羞ずかしさに生活感情が混じってしまいます。

だから、こんな服でノーパンノーブラなんて、とんでもない。門^{ひろゆき}恭さんに強制されたら実行するかもしれないけれど、彼はわたしの気持ちを先読みしすぎて、わたしが自分で限界だと思っている以上の厳しい責めをしてくれません。

でも、だからこそ、結婚生活を続けてこられたのかもしれませんが。

今日は思い切って無茶をしてくださいって、おねだりしてみようかしら。だけど、彼がほんとうに限界を超えるような責めをしてくれたら――わたしは味をしめないようにしなくては。プレイをエスカレートさせていったら、どこかで結婚生活が破綻するのではないかと思います。

いっそのこと、夫と妻ではなく、一日二十四時間、一年三百六十五日、ずっと御主人様とマゾ牝奴隷の関係でいたいなんて妄想をすることもありますけれど。妄想だけ。そこまで、わたしは真正マゾではないつもりです。

アルバイトにM嬢を選んだのは、そういうのに興味があったことは事実ですけど、本番をしなくていいから処女を守れるし、ヘルス嬢よりずっと稼げると思ったから――というのが、ほんとうのところですよ。

おかげで（上手な人に）縛られる快感とか

肛門性感に目覚めて。しかも優しいサディストに出会えたのですから、じゅうぶんに幸せなのですけれど。どうしても『けれど』がつきまどってしまいます。

などと考えているうちに、賃貸マンションのビルに着きました。門恭さんの所有しているビルです。ローンを組んで賃貸マンションを買って、賃貸収入でローンを返済しながら、すこしは純益が残る仕組みです。入居者が少ないと赤字になるのですが、今のところは順調のようです。

エントランス前のキーボードを『69+呼出+6969+呼出』と押して、中へ入ります。

いよいよ、たっぷり虐めてもらえます。どれだけ注意していても、手首に縄跡が残っていたり太腿に鞭痕が刻まれていたりしたら、ふとした拍子に娘に見られるかもしれせん。わたしはマゾだから、パパに虐めてもらっている――なんて、言えるはずもないです。両

親の（ノーマルな）性生活を見てしまって、それが一生のトラウマになっているなんて、読者投稿四コマ漫画の定番ネタですからね。

でも、今夜は娘がお友達の家でお泊り会。どうせ、明日の午後までは帰って来ないから、身体じゅうびっしりプレイの痕跡が残っても大丈夫なのです。帰りに着替える服も、ちゃんと持って来ています。

エレベーターに乗って、Rのボタンを押しました。ふつうは光りませんが、さっきのパスワードを打ち込んでから五分間は反応するのです。屋上へ出るドアは、わたしと門恭さん（と管理会社）しか持っていない鍵で開けます。娘の^みあ^あ彌愛には持たせていません。だって、屋上のペントハウス（プレハブの事務所）は、門恭さんのもうひとつの収入源でもある同人サークルの仕事場なので、娘には見せられないようなコミックとかSM小説とかが何十冊と置かれています。抽斗の奥には、縄とか鞭とかも隠してありますし。

ドアの前で深呼吸をして。ノックをしないで、中に入ります。

わたしも門恭さんも、日常からSMへのスイッチの切り替えが苦手なのです。M嬢をしていたときは、プレイルームで土下座してお客様を待っていればよかったです。

今、門恭さんの後ろに立っているのは妻の萌恵もえです。

わたしは気持ちを切り替えて、彼の背中に向かって土下座します。

「旦那様、モエをかわいがってください」

御主人様ではなくて旦那様。門恭さんの発案です。これなら、日常の場でうっかり口走っても、そんなに不自然ではないでしょう。同様に、わたしはモエと名前のままで呼ばれます。家ではママだから、やはりプレイ専用の二人称ということになりますね。

旦那様が振り返られました。

「本日は、長袖とパンツの着替えを持ってきました」

弥愛がお泊り会で帰って来ないことは、旦那様もご存じです。家に帰るまでの間もSMプレイの痕跡を他人に見られることがないから、たっぷり虐めてくださいという意味を、もちろん旦那様はわかってくださります。

「立て」

旦那様が、わたしのぼろぼろの服を品定めするかのようにご覧になります。

そして、机の抽斗から手錠を取り出されました。わたしの左手首をつかんで、金属の輪をカチリと閉じます。それから、わたしの両手を後ろへねじって、右の手首にも。

両手の自由を奪われると、とくに後ろ手にされると、胸が切なくなっていて、腰の奥がじいんと痺れます。あ……熱い汗がじゅくじゅくっと牝穴（プレイのときは、できるだけ卑猥な言葉で考えます）からあふれてきます。

旦那様が正面に立たれて、腕を伸ばしてわたしの襟首をつかまれました。

びりりりっ……

無言で、強い力で、ブラウスを引き千切られました。

「きゃあっ……ひどい」

期待していたとおりのことをしていただいても、女としては抗議しなければなりません。

旦那様は何もおっしゃいません。泣き叫んでも誰も助けに来てくれない密室で、わたしは旦那様に襲われているのです。

旦那様の手が、ブラジャーのストラップに掛かりました。カップとひとまとめにして、ぐいっとずり下げられました。

「いやあ、羞ずかしい！」

背中を向けてうずくまりました。最初のご挨拶は別ですが、悦んで虐めていただいているというパターンは嫌いです。わたしの意思は無視されて虐められているという形が好きです。

スカートを太腿までずり下げられました。

チキチキッという音は、カッターナイフの刃です。それがショーツに差し込まれて、ず

たずたに切り裂かれました。

「素っ裸になったところで、もうすこし愉しませてもらおうか」

うずくまっているわたしの首に、太い首輪が巻きつきました。

日々バストアップに精進しているDカップを背後から鷲掴みにされました。指が根元に食い込んできます。

「そら、立て」

あああ。股間を足の甲で持ち上げられています。わたしのじゅくじゅくを気づかれたでしょう。

「いやあ……」

ひどいことをされているのに、こんなに濡らすなんて、羞ずかしいです。

「逆らうと泣きをみるぞ」

右の乳房から痛みが消えました。でも、それは一瞬。淫核を摘ままれて——ひいい、抓りながら上へ引っ張られています

「痛い、痛い……」

わたしは目のふちに涙をにじませながら、跳び上がるようにして立ちました。

首輪に犬の散歩用のリードをつながれました。引っ張られて、外へ連れ出されます。

いつものように、向かい側にある給水塔に磔にされるのでしょうか。適当に抗いながら、素直についていきます。

え……？

途中で、わたしは立ち止まりました。屋上は周囲をぐるりと看板で囲まれています。広告収入のためですが、屋外プレイの目隠しがほんとうの目的です。

リードを強く引っ張られました。

「まだ逆らうつもりか？」

「でも、看板がはずれて……」

看板があった空間の向こうにビルが建っています。他人に見られるかもしれないという不安は、わたしの牝穴を疼かせます。でも、ほんとうに見られてしまうのは――すこし厭です。

「フィットネスでシェイプアップした自慢のボディだろ。見てもらいたくてうずうずしてるんじゃないか？」

からかっていらっしゃるような口ぶりです。では、何もかも計算した演出なのです。

「はい、旦那様がお望みでしたら」

ビルの窓は、とても小さく見えます。ビルからは、わたしのヌードは、もっと小さくしか見えないはずですが、それでも、拘束されていることくらい見分けがつくかもしれません。

まだちょっと羞ずかしいのですが、ちょっとだけ勇気を出せば克服できます。

わたしは旦那様に引かれて、給水塔の前まで行きました。

旦那様はタンクを支えている支柱の高いところに首輪のリードを結ばれました。

わたしは支柱に向かって立っています。全裸で無防備に正面を晒すのは、羞ずかしいことが好きなマゾ女でも、たしなみに欠けます。それに、旦那様はわたしの八十八センチのヒ

ップを鑑賞なさるのがお好きです。旦那様がおっしゃったように、シェイプアップを心がけていますから、すごくキュートな逆ハート形だと、ちょっぴり自惚れてもいます。

「こっちを向け」

ご命令には逆らいません。後ろ手錠を掛けられているから、どこも隠せません。

旦那様の目が、上から下まで、ゆっくりとわたしの裸身を舐めていきます。娘を母乳で育てたと言うと、たいていの人がびっくりするくらい、八十六センチのDカップは若々しく張っています。

わたしの股間には、飾り毛がありません。ときどき旦那様が剃ってくださるし、自分でもお手入れをしています。わたしに飾り毛があったのは、M嬢のアルバイトを始める前と、弥愛を妊娠してからの四年間だけです。

「そこで待っている。向きを変えるなよ」

自分で正面を向いて淫部を晒しているのは羞ずかしいです。大の字礫にされれば、不可

抗力ですから諦めもつきません。でも、『厭』は言えません。わたしが本気で言っていると誤解したら、旦那様は赦してくださいませ。

「……はい」

素直に、羞ずかしそうにお返事をしました。

旦那様は、わたしを責めるための道具を取りに、ペントハウスへ引き返されました。きっと鞭でしょう。ここでなら、何かに当たる心配をせずに、思いきり振り回せます。

きっと、いつもよりずっと鮮やかな鞭痕が肌に刻まれるでしょう。そう思うと、また牝穴から蜜が滴ってきます。

わたしは、肌を縄の跡や鞭の傷で飾られるのは好きです。でも正直にいうと、痛すぎるのは苦手です。一本鞭で股間を打たれて気を逝かす人がいます。わたしには、とても真似ができません。

旦那様が戻られました。すごく凶悪な鞭を手にしてらっしゃいます。

「怖い……」

本心です。SMグッズの専門店でなければ売っていない、ハードなバラ鞭です。紐の一本ずつが革で編まれているので、一本鞭のミニチュア版を束ねたようなものです。

「正面を向いているよ」

水平に張った鞭の紐の間に双つの乳首を挟んで、左右にしごかれました。痛いのに、乳首が固くしこっていきます。

「十発の数え打ちだ。間違えたら五発ずつ増やして、最初からやり直させるぞ」

耳元にささやかれて、つい本音を口にしてしまいました。

「はい、頑張ります」

旦那様は牝穴に指を突き立てて、わたしが鞭を期待して濡らしているのを確認されてから、鞭を構えます。

腕が水平に上がって、ぶんっと振られました。

バッチイン！

瞬間的な鋭い痛みが乳房を走り抜けました。

切られるような痛みの、かなり手前です。

「ひとつ……」

バックハンドで、反対側から鞭が飛んできます。

バッチイン！

「ふたつ……」

今度のほうが痛かったです。

バッチイン！

バチン！

鞭が走り抜けるたびに、乳房がひしゃげて鞭に持っていかれて、ぷるるんと大きく弾みます。わたしの意思とは関係なく、乳房が勝手に踊っています。

「すこしはこたえたようだな」

旦那様が手を休められました。六発目を数えたとき、わたしの声に悲鳴が混じったせいでしょう。

わたしの乳房、もう赤く腫れあがっています。バラ鞭ですから、細い鮮やかな線刻が無数に刻まれています。

痛みで縮こまっている乳首を、旦那様がこねくりまわします。たちまち勃ってきます。

旦那様が後ろに下がって鞭をお構えになりました。

バッチイン！

「ななつ……」

ひと休みして痛みへの感受性が回復したので、鮮烈なすがすがしい痛さです。

バッチイン！

「やっつ……」

バチン！

「ここのつ……」

バッシインン！

「とお！」

最後の一発は、とびきり痛かったです。

「脚を開け」

休む間もなく、つぎのご命令です。

「あああ……」

わたしは、ぴたっと脚を閉じました。お股への鞭打ちは苦手です。

もちろん、旦那様は赦してくださいませ。逆らえば、鞭打ち以上の罰をいただきます。でも、鞭をいただく姿勢を取るのは、鞭への耐性がついてきたと思われそうで厭です。つらいことは、無理矢理に強いられて泣く泣く従う。そうでなくてはなりません。

ぴったり密着させた内腿の肉をえぐり抜いて、鞭の柄が前から後ろへ抜けました。束になった鞭の紐が淫裂に食い込んできます。

「素直に脚を開け」

「厭です。開いたら、そこを叩くつもりなんでしょう？」

旦那様はそれ以上はなにもおっしゃらず、いっそう強く鞭を食い込ませて、それを前後にしごきます。

「きひい……」

股間にちりちりっと鋭い痛みが走ります。反射的に腰が引けて、でも鞭からは逃がられません。

わたしは痛みには震えながら、両脚をそっと

開きました。

「そんなに後じさるな。もっと前に立て」

「そんな……ひどいです」

おそるおそる、ちょっとだけ前へ進んで、引けていた腰をしゃんと伸ばしました。怖いけれど、わたしが限界に達する直前（実は、もっと手前）で責めをやめてくださるだろうと、それは信じています。

「これは数えなくていいぞ。五発を耐えきったら褒美をやる」

ご褒美は肛姦でしょう。それは好きですけど、旦那様は、事前の腸洗滌を浣腸責めになさいます。これは、つらいです。

旦那様が後ろに下がって、鞭を握った右手をだらんと垂らしました。

「そらっ！」

掛け声とともに鞭が弧を描いて、お股に食い込みました。

バシイン！

「ひいいっ……！」

鞭の先端が跳ねて、肛門まで叩きました。

すぐに二発目がきます。

バッシインン！

「きひいっ……」

鞭の先端が同じように肛門を直撃して、それから鞭全体が淫裂を斜め上へこすり上げます。

「……痛い！」

パシン！

三発目は手加減してくださいました。

「あうう……」

股間が痺れて、痛みの中にちよっぴり快感があります。

パシイン！

「ひいい……」

悲鳴は、マゾヒスティックな気分を盛り上げる伴奏です。

その余裕を見抜かれました。旦那様のバックスイングが、ぐんと大きくなりました。

ズバッシイイン！

股間から頭まで閃光のような激痛が走り抜けました。

「ひぎゃああっ……！」

混じりっ気無しの悲鳴が喉から吹き出しました。がくんと膝が折れて、首輪が喉に食い込みます。

「よく耐えたな。しばらく休ませてやる」

わたしを給水塔に吊るしたまま、旦那様はペントハウスへ戻って行かれました。

息が苦しくなって、たぶん頸動脈も圧迫されているのでしょう、目の前が薄暗くなってきました。股間の痛みをこらえて、ぐっと膝で踏ん張りました。

もしも、わたしが気絶していたら、足が地面に着いているのに首を吊られて死んでいたかもしれませぬ。というのは誇張です。これしきの責めではそんなことにならないと、旦那様よりもわたしのほうがじゅうぶんに心得ています。なんといっても、他人との（サデ

ィストとしての) S Mプレイの経験がなかった旦那様を一人前のサディストに育てたのは、わたしなのですから。

正確には、ちょっと違います。最初の二回は、S Mクラブのマダムに二人とも指導していただきました。その後は、キーワードで責めを加減するプレイで、わたしが門恭さんにテクニックを磨いてもらいました。

「もっときつくお乳を縛って、わたしを泣かせてください」

「鞭が厳しいです。お慈悲をかけてください」

「でも、手首のスナップは、もっと鋭く」

「あうう……お浣腸は限界です。もう、お赦してください」

詳しい経緯は、ずっと後に作られた門恭さんの『マゾ妻逆調教日記』というブログに書かれています。

わたしと門恭さんのS Mプレイは、そんなに長く続きませんでした。わたしが、彼の子供を妊娠したからです。

お店としては本番禁止が建前ですから、射精を望まれるお客様（が、ほとんどでした）にはM嬢の場合はイラマチオかアナルフアックで対応していました。縛られて（チップ目当てで）レイプされる子もすこしはいましたけれど。

でも、わたしは真正の処女でしたから、たとえ常連のお客様でもプレイの前に、本番行為には百万円の罰金を払うという誓約書にサインをいただいていた。

門恭さんとの十回目のプレイのときです。
「あれ？ この誓約書……？」

百万円を十万円に書き換えておいたのです。
わたしには、絶対に処女を守り抜くという気持ちなんか、ありませんでした。ただ、行きずりのお客様に処女を奪われるのは、女としての誇りが許しません。

門恭さんは、もう行きずりのお客様ではありません。わたしが手塩にかけて育てたサディストという、特別な存在になっています。

それに、肌が合うというのでしょうか。まだまだ下手くそな縛り方なのに、彼に縛られると頭がポワンととなるのです。

「んふふ……どう解釈しても、いいわよ」

緊縛のとき、わたしは座禅転がしという縛り方を教えてあげました。ここまですれば、据え膳ですよ。

そして、肌が合い過ぎて。わたしは一発で妊娠してしまったのです。初体験がゴムでは感激が薄れますし、安全日だと高をくくっていたのが失敗（結果的には成功？）でした。

誰の子か疑う余地は無く。門恭さんは男としての責任を取ってくださいました。

悪阻がおさまってから妊娠八か月目くらいまでは軽いプレイを続けていました。でも、剃毛は禁止です。

出産後もSMプレイは続けていましたが、パイパンとか縄跡などは娘に説明できないので、羞恥プレイが主体でした。ノーパンでミニスカートなんて、すごく羞ずかしくて、且

那様に強く言われてしぶしぶ――なのに、膝までお汗が垂れてしまうのですから、ますます露出プレイが苦手になりました。

十年前に二人目を授かったのですが、かわいそうなことに流産してしまいました。子宮も傷ついて、妊娠は困難と宣告されました。

その悲しみを忘れるためにも、わたしは本格的なSMプレイにのめり込んでいきました。剃毛も復活です。弥愛のお風呂は、パパの担当になりました。

もっとも、門恭さんも百パーセントのサドではなく、マゾっ気も人並み以上です。三十代までは何年かに一度、全身完全除毛して年上の女王様に虐めていただいていたました。もちろん、わたしとのプレイも続けますが、飾り毛が復活するまでは全裸にならず、イラマチオもしていただけません。

わたしにも、他人とのプレイや浮気を認めてくださっているのですが、自分から積極的にパートナーを探す気にはなれませんでした。

旦那様の目の前で、ほかの人に犯されたことは何度かありましたが、それもお口と肛門だけです。牝穴には、いまだに旦那様しか迎え挿れていません。いっそのこと、旦那様のご命令で誰かにレンタルされてみたいなんて妄想しますが、それをおねだりする勇気はないのです。

十分以上も放置されてから、旦那様が戻ってこられました。

吊りから解放されたわたしは、目の前に広げられた青いビニールシートの上にひざまずきました。首輪と手錠もはずしていただきました。でも、手は後ろにまわしたままにしておきます。

その手首を高くねじ上げられて、高手小手に縛られました。乳房の上と下にも縄を巻かれて、腋の下で上下の縄をひとまとめに絞られました。胸がきゅうんと切なくなるのは、縄で圧迫されたせいばかりではありません。

首に別の縄を巻かれて、乳房の谷間でも上下の縄がひとつに合わされました。上下左右から乳房が圧迫されて、じいんと痺れます。

「くうう……苦しい」

胸が圧迫され過ぎて、呼吸も困難です。でも、頭に霞がかかってきたのは、酸素欠乏のせいばかりではありません。

「そこに座れ」

わたしは膝立ちの姿勢を崩して、体育座りをしました。

旦那様がわたしの足首をつかんで胡坐を組ませます。

「え……？」

水浣腸無しで、いきなりご褒美をいただけるのでしょうか。そうだと嬉しいのですが。

わたしは座禅の形に足を組まされて、重ねた膝を縄で縛られて首とつながれました。その縄が引き絞られて、上体が前へ倒れていきます。

「く、苦しいです……」

四十五度ちかくにまで折り曲げられて、わたしは本気で呻きました。旦那様は、そこで赦してくださいます。

「それでは、約束した褒美の下準備だ」

このまま水浣腸をされたら、大変なことになります。

「ちゃんと、お浣腸はすませてきました」

この訴えは聞き入れてもらえませんでした。わたしは膝を支点にして前へ倒されて、頭がビニールシートに着きました。お尻を高く突き出した――座禅転がしです。

給水塔に付属の水道から伸びているホースのノズルが肛門に押し当てられて、強い力でずぶずぶと押し込まれました。ノズルの先端は細いし、金属の表面は木やプラスチックより滑らかです。すっかり性器として調教されている肛門は、これくらいではほとんど痛みを感じません。

ぐるるるるる――と、水流が腸に押し入ってきます。これは、不快です。だんだんお腹

が張ってきます。

限界のずっと手前で注入が止まりました。でも、いつもの腸洗滌とは違って、太いアナルプラグを挿入されました。根元がくびれているので、自分でいきんでも抜けません。

わざわざプラグをするのですから、わたしが便意に苦しむところを鑑賞なさるのでしょう。そして、いつものように、排泄の羞ずかしい姿も。不特定多数の人に羞ずかしいところを見られるのは厭ですが、旦那様に見られるのは厭ではありません。

そんなことを考えると、牝穴の奥が、じんじん疼いてきます。

ああん。旦那様が淫裂に指を三本も刺し挿れて――わたしがしっかり濡らしているのをお確かめになりました。

旦那様が着衣を脱がれる気配があって。

ずうんと、後ろから牝穴に挿入されました。

「あああ……んん」

牝穴の疼きが、一気に快感に変わりました。

でも、旦那様はわたしを追い上げようとはしません。軽いピストン運動だけで、それもすぐに中断されました。

そして、無慈悲な宣告。

「今日は噴水にするぞ」

「ええっ……厭です。いつものようにさせてください」

いつものようにというのは、屋上の壁に沿って掘られている排水溝への排泄です。屋上には水回りの設備が無いのですから、そうするしかありません。羞ずかしいけれど、旦那様にしか見られないのだから、あまり羞ずかしくありません。

でも、このまま——座禅転がしのまま排泄すると、まさしく噴水になります。こんなの、もう何年もしたことがありません。過去には何度かさせられているということです。

「どうしても厭なら、足をほどいてやってもいいぞ」

ほうっと、ため息が漏れました。安心はし

ましたが、こんなに簡単に責めを中止されると、欲求不満がつのります。

「ただし、あと三十分は、そのまま放置するぞ。今すぐ出したいなら、噴水だ」

「ひどい……」

少なめの水浣腸でも、三十分はきついです。それに……牝穴もかまっていたいただいて快感の余韻があるうちに、ご褒美を欲しいです。でも……三十分も悶え苦しむと、もしかすると被虐気分が盛り上がって、ご褒美がいつそう素晴らしいものになるかもしれません。でも、ならないかもしれません。

わたしには決められません。

「……旦那様の望まれるようにしてください」

わたしが本気で厭がっても訴えを無視して責め続けるなんてこと、門恭さんにはできっこないです。だから安心して虐めていただけるのですが、すこしだけ物足りない思いも心の片隅にはあります。

旦那様は、ためらうことなくアナルプラグ

を引っこ抜かれました。

ぐぼん。ぶじゃあああっ……！

凄い勢いで水が噴出しています。肛門がぶるぶる震えて、快感が高まります。

「あああ……羞ずかしい。お願いです、見ないでください」

絶対に聞き届けてもらえないお願いですが、恥知らずなマゾ牝でも、これくらいのしおらしさは保っていなければなりません。

「もっと見てください」なんて言ったら、旦那様も興奮めでしょう。

噴水が止まると、強い水流をお尻に浴びせられました。その水が身体じゅうに流れ落ちますから、それもホースの水で洗われます。

「痛い……冷たい……」

九月下旬ですから、水道水はまだそんなに冷たくはありません。給水塔の下に置かれたポンプで圧力を高められているので、水圧の痛みが、冷たさまで錯覚させるのです。

たっぷりの水責めのあとは――まだ、ご褒

美をいただけません。牝穴に極太のバイブを突っ込まれました。牝穴の縁が裂けそうなこの感触は、直径五センチの凶器です。左右の太腿に紐が巻きつけられて、バイブが固定されました。

「しばらく、これで遊んでいろ」

ドドドドドッ……

サイズに見合った、ものすごい振動です。

「ああっ……ああああっ……」

声が裏返ってしまいます。

旦那様は、わたしをほったらかして、看板と排水溝の汚れにホースで水をかけています。わたしも、料理をしたら食べる前に調理器具を洗わないと落ち着かないタイプです。もちろん、わたしを焦らして、同時に寸前まで追いつけておこうという目論見が旦那様にはあります。

水音が止まりました。

「さあ、褒美をやるぞ」

旦那様がわたしの後ろに来られて。

ずううんと、肛門にご褒美をくださいました。

「はああ……ふうう」

正直にいうと、旦那様はアナルプラグより細いし、硬度でも及びません。でも、生身の旦那様に犯していただいている感激は、けっしてアナルプラグでは得られません。

アナルプラグは、どこまでもアナルプラグ。でも、ペニスの後ろには旦那様の肉体と人格のすべてがある——なんて哲学めいた思いは、二つの穴から全身に流れ込む力強い快感に押し流されてしまいます。

わたしは、エクスタシーへの坂を一目散に駆け上がっていきます。

「うゝあゝあゝっ……逝く逝く逝くう……あゝあゝあゝっ！」

あまり旦那様にも聞かれたくない、太い唸り声になってしまいます。

「あゝあゝっ……落ちる、落ちるうう」

エクスタシーの頂点で、身体がぶわあっと

浮かび上がって、そのままどこまでも落ちていきます。

「落ちろ、もっともっと落ちろ」

旦那様の腰使いが荒々しくなりました。

落下のスピードがぐんぐん上がっていきま
す。

「びいゝいゝ……落ちるうううっ！」

不意にバイブの振動が止まって。落下の感
覚が消えて、ふうんわりと宙に投げ出されま
した。身体が消え失せて、柔らかな快感の塊
りだけになってしまったような感覚です。

座禅転がしから胡坐座りの姿勢に戻されて、
海老責めの縄だけが解かれるのを、ぼんやり
と感じました。

ふと気がつくと、旦那様はペントハウスへ
戻られたみたいです。

わたしは、まだ肉体を取り戻していません。
快感の塊りが、すこしずつ沈殿していくよう
な、満ち足りた安らかな気分に浸っています。

わたしがすっかり肉体を取り戻した頃合を見計らって、旦那様が戻ってきて、縄をほどいてくださいました。

わたしは土下座して、お礼を述べます。「たくさん虐めていただいて、ありがとうございました」

プレイの終了です。わたしは、まだふらつきながら立ち上がって、自分でバイブを抜きました。

「はい」

バイブを返すのが、羞ずかしくて照れ臭いです。

門恭さんは物々交換みたいに、わたしの肩にバスタオルを掛けてくれました。

「こんなにきつく縛られたのは、三か月ぶりくらいかしら」

これは照れ隠しです。

「――だな。寒くなる前に、もう一回くらいは屋上に晒してやろう」

真冬に屋外で全裸磔にされるほど、わたし

はマズではありません。そんな厳しい責めを
されてみたいと思うことは、たまにはありま
すけど。絶対に自分からおねだりはしません。

「看板は元に戻しておいてね」

「ほんとに、それでいいのか？」

見ず知らずの人に裸、それも縛られている
ところを見られるのは本気で羞ずかしくて本
気で厭ですけど、もし門恭さんにそうされて
も、わたしは離婚を考えたりはしないと思
います。そんなわたしの心を見抜いたかのよ
うな言葉です。

「馬鹿……反対側のは、絶対に厭ですからね」

今見えている隙間の反対側には、このビル
と同じ高さのビルが建っています。最上階か
らは覗かれてしまいます。

それを思い出すと、まさか看板の隙間から
は見えないでしょうけれど、急に不安になっ
て、ペントハウスに逃げ込みました。

替えのシャツとジーンズは持参しましたが、
それだけです。わたしは素肌にその二点をま

としました。

「下着も持ってくればよかったかな」

ゆっくりペントハウスに戻ってきた門恭さんに、ちょっぴり照れ隠しです。でも、実はわざと忘れてきたのです。それを見抜いたかのように、門恭さんがからかいます。

「なんだったら、バイブを挿れて帰ってもいいぞ」

「イヤよ」

我ながら、取りつく島もない返事になりました。

「それじゃ、帰るわね」

いちおうは、きちんとお別れのキスをして。わたしは夫に背を向けました。

2. 娘への疑惑

「ただいまあ」

家に誰もいないとわかっているにもかかわらず、帰宅の挨拶をします。子供のころからの習慣です。弥愛にもさせています。パパは、しょっちゅう忘れます。

娘は、ほんとうに素直に育ってくれました。わたしの母親に言わせると、「昔の萌恵にそっくり」なんだそうです。

でも、母も昔のわたしの本性は知らないのではないかと思います。

わたしに限ったことではなく、たいていの女の子がそうだと思いますが、●学生の頃からエッチなことに興味津々でした。そして、もしかするとわたしは、ちょっとだけ実行力が平均以上だったかもしれません。弥愛くらい年齢の頃には、ピンクローターとかマドラーとかを、机の奥深くに隠していました。

先が球形になっているマドラーは、お尻の穴に挿れていました。快感はそんなにありませんでしたが、凄くいけないことをしているという思いに胸がときめいたものです。

だから、M嬢のアルバイトを始めてすぐに、淫核に匹敵するほどの肛門性感を開発されたのです。

ふっと、気がかりになってきました。弥愛が昔のわたしにそっくりだとすると、まさか、同じようなアイテムを隠していたりはしないでしょうね。

ということで。二階の子供部屋へ侵入——ではなくて、親としての立入検査です。

勉強机も最近プライバシーとか配慮されていて、いちばん上の抽斗には鍵が掛かるようになっています。引っ張って見たら、やっぱりロックされています。

でも、メーカーは親の心配にも配慮してくれています。弥愛にはスペアキーも渡していますが、実はもうひとつあるのです。それを

使って……

なんてこと！

ピンクローターもマドラーも、あるではありませんか。それどころか、洗濯ロープと洗濯ばさみもあります。マチ針と蠟燭とシャンプーのポンプまで。

SMにうとい母親なら、見過ごすアイテムかもしれません。でも、わたしは大ベテランのマゾです（威張るところではないですね）。

ロープは、もちろん自縛プレイです。洗濯ばさみは乳首です。まさか、淫核にまで使っては……いるかもしれません。

シャンプーのポンプが、いちばんわかりにくいでしょうね。これは、敏感な突起を吸い出すのに使います。エログッズで売っているスポイトなんかより、ずっと強烈です。しかも、三つもあります。敏感な突起の数と同じです。まさか、いっぺんに三つとも使っているのでしょうか。

こんなたくさんアイテムを使って、弥愛

は自虐オナニーに耽っているのですね。

わたしは週二回フィットネスに通っています。娘の帰宅より遅くなります。そのときを狙って遊んでいるのだと思います。

でも、落ち着いて観察すると、まだそんなにはのめり込んでいないようです。マチ針は未開封ですし、蠟燭は芯が黒くなっても短くはなっていません。ロープも、ぜんぜんくたびれていません。ピンクローターは、これは見た目にも中古といった感じです。

わたしは、そっと抽斗を閉めて鍵を掛け直しました。

さあ、困りました。

世間一般の母親でも、持て余すでしょう。面と向かって叱れば、娘は反抗的になるに決まっています。それとも、アイテムを家の外に隠してしまうかもしれません。

それに。わたしには娘を叱る資格がありません。自分がしていたことを娘に禁じるというのは、絶対に間違っています。

こういうときは、パパに相談するに限ります。さいわい、子供の教育は母親に丸投げというタイプではありません。娘も、パパになついています。初潮を迎えたとき、わたしに報告した後で、パパにも自分の口から告げたくらいです。

でも、その日は相談できませんでした。晩御飯はいらないうんて連絡があつて、珍しいことに、外で呑んできたのです。

そういうわけで、日曜の朝に。

「ねえ、パパ……」

これは、主婦として母親としての発言だという意味です。ダブルベッドの中ですから、使い分けをきちんとしておかないといけません。

門恭さんと呼びかければ、ふつうの営みのおねだりです。もちろん、旦那様と呼びかける前にはベッドから降りて土下座です。いえ、自宅では滅多にしませんけれど。

「なんだ……？」

パパは、まだ眠たいみたいです。

「弥愛のことだけど。SMとかに興味があるみたい」

「蛙の子は蛙——かな」

「んもう。ふざけないで。あの子、ロープとか洗濯ばさみとか、それとピンクローターも隠してるんです」

ぱしっと目の覚めた気配が伝わってきました。

「あいつも、もう●三か。色気づいてもおかしくないさ。しかし、洗濯ばさみはともかく——ロープねえ」

パパがなにを考えているか、わたしにもわかります。自縛遊びは、事故が怖いのです。首に巻きつけたりしたら、予想以上にきつく締まることもあります。そのとき、手まで縛っていたら、最悪の場合、首吊り自殺になってしまいます。

「手錠なら危険性はぐっと減るが、まさかプ

レゼントしてやるわけにもいかんしなあ」

手錠なら、最悪でも解除できなくなるだけです。でも、自縛遊びのアイテムをプレゼントする親なんて、どこにいるでしょう。

「真面目に考えてください」

「俺は大真面目だよ。SMごっこをやめろとは、俺たちに言う資格はないし、娘に面と向かってそんなことを言えば——控え目に言って、收拾がつかなくなるだけだ」

いちいち、パパの言うとおりです。

「そうねえ……」

せいぜい、娘から目をはなさないようにしてみましようか。でも、秘密の隠れ家みたいな場所を見つけて、そこで遊ぶようになるかもしれません。

パパも●学生のころ、休日には誰も出入りしない資材倉庫に忍び込んで、同級生の男子と二人遊びをしていたそうです。そして、倉庫の関係者に見つかって——親にも学校にも告げ口しない交換条件として、性的に酷い目

に遭ったそうです。余談はさておき。

こうなると。うっかり手首に縄の痕でも残してくれないかと願ってしまいます。それを見つけて、やんわりと注意する——それくらいしか、いまは思いつきません。

それとも、さっさと彼氏を作ってもらいたいものです。パパの台詞ではないですが、妊娠さえしなければ、男女の仲になってもかまいません。彼氏に諭されてノーマルに戻るか、わたしのとき（でも、●九歳でした！）みたいに、彼氏を逆調教してしまうか。逆調教は無理ですね。初心者同士で研究でしょう。

まさか、出会い系なんかには走ったりはしないでしょうね。娘には、そこまでの度胸はないと思いますけれど。

ふうう——溜め息が出てしまいます。もしかすると、わたしたちは子育てのもっとも難しい局面を迎えているのかもしれない。

3. 露出フィットネス

娘の様子に気を配っていますが、とくに変わったところはありません。独り遊びの痕跡を身体に残すようなヘマはしていませんし、外でこっそり何かしている気配もありません。帰宅は午後六時過ぎですが、これは手芸部にはいつているからです。

ですが、自虐遊びも確実にしています。実は月曜日に娘が学校へ行ったあと、例の抽斗を開けて写真を撮っておいたのですが、翌日にはピンクローターと洗濯ばさみの位置が違っていました。ロープとマチ針は、写真の位置から動いていませんでした。

乳首を洗濯ばさみで虐めながら、ピンクローターで淫核を刺激していた。それくらいなら、可愛いものですね——世間一般の母親は、そうは思わないでしょうけれど。

月曜日は娘のことを案じながらでしたので、

フィットネスが上の空でしたが、今日は気合を入れます。実は、週末に旦那様に虐めていただいたので、マゾ気分がまだ残っています。だから、水着は赤色のを選びました。

本格的な競泳用ですから、裏地はありません。ほんとうは白色にしたかったのですが、それでは露出を意図していると見破られるので、諦めました。意外と知られていませんが、赤も透けやすいのです。

フィットネスとはいっても、わたしはスイミングが主体です。

最初の三十分はストレッチ。二十代の女性が三分の二です。スパッツとかハーフパンツの人が多いのですが、水着やレーシングウェアの人少しはいます。彼女たちは、若い男性インストラクターに露骨な色目を使っています。

三十を過ぎて競泳水着なんて、さすがにわたしだけです。でも、男性インストラクターに興味はありません。といえは嘘になります

けれど、わたしはインストラクター本人に興味があるのではなく、彼の視線を過剰に意識しているのです。

(じゅうぶんに二十代前半で通るボディだ)なんて思ってくれたら、単純に嬉しいです。

(いい歳して露出狂かよ)なんて思われたら、羞ずかしさのあまり濡らしてしまいます。

ストレッチが終わるとプールへ。

「こんにちは。気合がはいっていますね」

インストラクターの女性です。彼女の水着も、裏地の無い競泳用です。おとなしい青なのであまり透けません、胸ポチも股間の盛り上がり挟まれた縦筋もくっきりです。彼女も、下の毛は処理しています。彼女は男性会員の前でも、右手を後ろにまわして左の二の腕をつかんでいます。まったく無防備どころか、胸を突き出す形になります。

ですが、彼女が担当するのは女性会員だけなので、露出狂とか痴女といった噂にはなっていません。

わたしが、すこし遠い場所にあるこのクラブを選んだのは、彼女がいたからです。

出会った瞬間に、わたしには彼女の性癖が理解出来ました。わたしが似たような（そして、もっと透けやすい）水着に着替えたら、彼女もわたしのことを半分だけ理解してくれました。

いえ、全部かもしれません。彼女には自己満足的な露出願望はあっても、マゾヒストではありません。それをわたしが見抜いているように、彼女はわたしがマゾヒストだと見抜いているのかもしれません。

「今日は、うんと自分を虐めてみたいんです」

もちろんSMの話ではありませんよ。

「それでは、二百メートルウォーキングのあとは、すぐに四百メートルを三本にしましょう。いけますか？」

「はい」

首まで水に浸かってのウォーキングは有酸素運動ですから、ダイエットにはスイミング

よりも効果があるくらいです。これは、いつものメニューです。四百メートルを三本は、アスレチックな自虐です。このクラブの女性メニューの標準は、ビート板で百メートルを四本と、スイミングは百メートルを二本、全力ダッシュで五十メートルが二本です。

ウォーミングアップはストレッチですんでいるので、すぐプールにはいって歩き始めます。走ろうとしても身体が浮いてしまうので、ゆっくりと底を蹴りながら、身体を左右にひねってウエストのシェイプアップです。

二十五メートルプールを休まずに八往復。疲れ果てます。プールサイドのデッキチェアにおお向けになって、無防備に休憩です。

とたんに、プールサイドを歩く男性の数が増えました。もちろん、わたしは目を閉じているので、彼らがわたしの濡れ透けを横目でガン見していることには気づいていません。

うつ伏せになってヒップの割れ目も見せてあげたいのですが、さすがにそれは不自然な

のでやめておきます。

身体が冷めないうちに、スイミングを始めます。わたしは、いちおうはすべての泳ぎができます。なので、メドレーにします。

タイムトライアルではないので、飛び込まずに。バタフライで二十五メートル。バタフライは『いちおう』なので、ぱっちゃん、ぱっちゃんです。

クイックターンで背泳ぎ。ぐんと水を下に掻いて、できるだけバストを高くそらせます。うふふ。ウォーキング中の男性会員が足を止めちゃいました。

つぎが平泳ぎ。これは得意なので、無様にお尻が浮かんだりしません。残念です。

そしてクロール。いちばん速いけれどいちばんつまらない泳ぎ方です。

これで、やっと百メートル。まだまだ余裕です。

余裕でしたけれど、三百メートルで息があがってきました。最後の百メートルは、心臓

が破れるかと思うほどの苦行でした。

軽く五十メートルを流してクールダウンしてから、デッキチェアに、今度こそうつ伏せに倒れ込みます。

氣息奄々でも、男性会員が通りすがりにわたしの引き締まったボディと豊かなヒップを視姦しているのはわかります。男性インストラクターまで、通りすがってくれました。

息がじゅうぶんに整ったら、軽くウォーミングアップをして、四百メートルの二本目に挑みます。これは流し気味で余力を残しておいて。デッキチェアでの休息も短めにします。

三本目は前半を流して、最後の二百メートルは自発的に全力ダッシュです。自分をSM的に虐めるのが目的ではなく、脂肪の燃焼が目的です。

「すごいですね。インターハイで優勝経験があるって言っても、誰も疑いませんよ」

このインストラクターさんとは、フィットネスのお話しかしません。露出願望とか、そ

ういうことは口にしません。だって、どちらも相手をどうこうしようという下心なんかありませんから。でも、もし下心を持つとしたら——彼女のほうが若いのですから、わたしはタチにまわりたいと思うのです。

くたくたに疲れ果てて、それでもちゃんと晩御飯を作って。パパとは、ダブルベッドに並んで寝ただけでした。

そして、金曜日。娘が学校へ行ったあとに抽斗をチェックしたら。

驚きました。でも、すこしだけ安心しました。

太く長い鎖がついた小さな首輪が二つと、液晶表示とボタンが上下にならんだ南京錠とが、増えています。この南京錠は、タイマー式だと思います。首輪を手首に嵌めて鎖を南京錠でつなげば手錠になります。南京錠がタイマー式なら、決めた時刻までは解錠できません。

でも、鎖が長すぎるのが気になります。まさか、首に巻いたりはしないでしょね。

わたしだったら、あと二つ首輪を買ってきて、反対側につなげます。逆海老とかM字開脚固定とか、いろいろ遊べます。あ、股縄といますか股鎖も気持ちよさそうです。

ふうう——ですね。まさか、娘にアドバイスしてやるわけにもいきません。

それよりは、パパに報告して意見を聞いてみましょう。